

## 特別企画・基調講演

## 「パンデミックと舞踊の形而上学」

三浦 雅士

(文芸評論家・舞踊批評・日本芸術院会員・舞踊学会理事)

## ・発表要旨

「パンデミックと舞踊の形而上学」としましたが、「舞踊という形而上学」「形而上学としての舞踊」のほうが発表の内容に即しているかもしれません。言語による思考以前に身体があったであろうことは疑いありませんが、考えるべきその対象の筆頭が「死」であったことはさらに疑いありません。死を体験したものはいませんが、最後に体験するであろうことは間違いない。この不条理とどう折り合いを付けるかが、人間の最大の課題だったと思われまます。舞踊は、死すべき存在である人間が、死者を呼び返して時間をともにするもっとも有効な手段だったでしょう。舞踊こそ最初の哲学であり形而上学であったことは、少し考えるとすぐ分かります。しかも、日本ではその傾向がいつそう強かったと思われまます。

死と死後の世界を考えるのが形而上学すなわちメタフィジックスですが、文字通り、姿かたちを超えるものの学という意味です。たまたまアリストテレスの書が、物理学や生理学の次に並べられていたからそう呼ばれるようになったという説もあるようですが、広く流布したのは内容にふさわしい表題だと思われたからでしょう。とはいえ、メタフィジックスにはさらにふさわしい名称が、少なくとも日本にはあります。「重要無形文化財」という名称です。「形而上学は、感覚ないし経験を超越した世界を真実在とし、その世界の普遍的な原理について理性的な思惟で認識しようとする学問」だと事典にあります。が、「重要無形文化財」学としたほうが、いつそう近づきやすいことは疑いありません。しかもほんとうは、歴史も社会も経済も「無形文化財」なのです。

近年、ユネスコなどでも「無形文化財」は注目されているようです。が、日本とは違います。ジャズとか野球とかハロウィーンとかが対象になっています。日本の場合は、「重要無形文化財」の別の名は「人間国宝」です。どういうことでしょうか。人間の本質は生身の身体ではなく、動作、表情、思想にあると思われているということです。さらに言えば、その背後には、国民の一人ひとりが「人間国宝」でありうるし、なければならないという考えが潜んでいます。日本には実体ではなく現象を重視する傾向が強いです。

今回のパンデミックは、そういう、日本におけるパフォーマンス・アーツの根源に迫る、とても良い機会を提供してくれたと思います。考えるべきことが山積しています。

## ・講師紹介

三浦雅士（みうら まさし）1946年、青森県生まれ。69年、青土社創立と同時に入社し、70年代を通じ「ユリイカ」「現代思想」の編集に携わる。81年、執筆に転じる。80年代、舞踊の重要性に気づき、91年、新書館に加わり、編集主幹として「月刊ダンスマガジン」を創刊、編集主幹を退いた後も、「ダンスマガジン・インタビュー」を継続。著書に、『私という現象』、『青春の終焉』、『身体の零度』、『バレエ入門』、『考える身体』、『孤独の発明』、『スタジオジブリの想像力』などがある。